
紫の遺伝子

銀時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫の遺伝子

【Nコード】

N9563Z

【作者名】

銀時計

【あらすじ】

JS事件が終結してから数年後、管理局はその事件の主犯ジェイ・スカリエッティに実の息子がいるという事実を掴む。危険性があるかの調査に管理局が乗り出し始めた頃、その息子はゆっくりと世界の裏で暗躍をしていた。

プロローグ（前書き）

初めて書くので面白いか分かりませんがどうぞよろしくお願いします。

ブローグ

「何か欲しいものはあるか？」

「じゃあ、最新ゲーム機」

そんな会話をしている親子がいた。

夕暮れの何の舗装もされてない道路を歩きながら父親は再び子どもに尋ねる。

「夕食は何かいい？」

「カレーライス」

今時の子どもがよく答える模範的な解答を繰り返す我が子を微笑ましそうに見続ける男は何とも変わった格好をしていた。

スーツの上に学者が着ていそうなイメージがある白衣を纏い、その手には何故か野球グローブがはめられていた。

一方の子どもは白い半ズボンに青い半袖、手にはサッカーボールが置いてあった。

周りには二人以外の人の気配がまったくなかった。

川、森、広場、並木などはあるが人工物はまったくなかった。

いや、二人が向かう先には大きな古びた洋館があった。

「君は私のことが嫌いかな？」

「その前に実の息子に対して『君』っていわないで欲しいんだけど。後、嫌いじゃなくて好き」

素っ気なく返ってきた答えには不思議と愛情のようなものが含まれているようだった。

それを感じとったのか父親は嬉しそうな顔をした。

「次の仕事が終わったら父さんと一緒に暮らそう。もう、たまにしか会えないような暮らしは終わるんだ」

「本当？」

子どもは初めて興味を示したのかまじまじと父親の顔を見た。

「ああ、本当だ」

それを聞くと何も言わず少年はにっこりと微笑んだ。少年というよりは少女のような顔をしていたためかその笑顔はとても可愛らしかった。

それから数年後少年の父親 ジェイル・スカリエッティは管理局に捕まった。

そして、それから程なくして彼は獄中で謎の死を迎えた。

自殺か殺害か、死因が分からなかったがその事件は自殺として片付けられた。

そして、管理局がその歴史的犯罪者に血の繋がった子供がいるという事実気づくのはさらに数年後のことだった。

プロローグ（後書き）

次回はなるべく早く投稿しようと思います。

第一話 紫の遺伝子（前書き）

書き上げたので投稿します。

第一話 紫の遺伝子

ジェイル・スカリエッティに子供がいる。

管理局内においてはちょっとした噂になっていた。

管理局 正式名称時空管理局。

未知のテクノロジー、ロストログアを回収して保管したり、管理世界と呼ばれる彼らの管轄の平和を維持したり、犯罪者を検挙するのが主な仕事な組織だ。

そして、その組織内で今、ささやかれている噂が現在でも史上最大のテロと呼ばれる事件を起こしたジェイル・スカリエッティには子供がいるというものだった。

だが、所詮は噂。

はつきり言って都市伝説のような迷信めいたものだった。

出所も分からなければ、事実かどうかも不確か。

誰もがそんなことはないと思いつながら冗談、世間話、暇潰し、ちょっとした話題などに使っていた。出生不明の世紀の大犯罪者に息子がいるというのは思いのほか、話の種になるようだった。

そんな数ヶ月も経てば忘れられるような噂に危機感を抱いている人物達がいた。

それはかつてJS事件を解決まで導いた部隊、機動六課とその関係者達であった。

次元の海の中に本拠地を構える通称海、もしくは空と呼ばれる本局の廊下を今、歩いている彼女もつい一週間程前にその噂を聞き不安を抱き出していた。

その彼女を後ろから呼び止める声が聞こえた。

「あ、フェイトちゃん」

「あれ、なのは？」

なのはと呼ばれた彼女が振りかえるとそこにはロングの金髪をした同年代の女性が立っていた。

この二人も以前は機動六課に所属していたのだが、J S事件が終了してから機動六課は解散して、彼女達も別々の部署に転属となった。

それでも長い付き合いの彼女達は今でも交友を続けている。(とうかほぼ同棲状態なのだが)

そんな二人はいつものように楽しそうに会話を始めたが、やがてフェイトの方から話を切り出した。

「フェイトちゃん……あの噂聞いた？」

「それってジェイル・スカリエッティの？」

「うん」

二人は機動六課の構成員時代他の仲間とも力を合わせスカリエッティを逮捕したという過去がある。

そんな経歴を持つ二人だけにそういった噂には他の管理局員よりも敏感に反応してしまう。

さらに、二人にはその噂の心当たりがあった。

ナンバーズ。

ジェイル・スカリエッティが作った戦闘機人で構成されていて、メンバーの十二人は姉妹のような関係を築き、それぞれが『IS』と呼ばれる先天固有技能を持っている組織だった。

だが、事件後はメンバーの約半数が改心して、社会復帰をしていた。

残りのメンバーは死亡したり、スカリエッティと同じく軌道拘置所に収容された。

現在は解散しているその組織で問題なのはそのメンバー達をスカリエッティは『娘達』と呼んでいたことだ

もしかしたら、そのことが原因で今、噂が広がっているのではないか？

現在、彼女達は更正して、それぞれの道を歩き出している。

だが、そのことが世間に露見したらとんでもない混乱が起こるだろう。

なにせ、史上最大と言われたテロ事件のメンバーが五年も経たないうちに釈放されていることになる。

それゆえに、そのことを知っているものも管理局関係者の中でもないほんの一握りだ。

「やっぱり子供っていうのはシスターズのことだね？」

「うん、私もそう思う。一体、どこから噂が立ち始めたんだろう？」

話し合いながら歩き続ける二人には『本当に血の繋がった子供がいる』という考えはまったくなかった。

＊

「おい、スカリエッティ」

かつての大犯罪者のファミリーネームを軽々しく呼ぶ声が聞こえた。

声の主はファミレスの前で腕を振っていた。

車が次々に走りぬける道路の横断歩道の信号が青に変わるのと同じ時にその彼に向かって呼ばれた相手が駆け寄ってきた。

「先輩、そっちの方で呼ばないでくださいって前から言ってるじゃないですか」

そう言いながらもあまり怒ってない様子の彼はどうやら口で言うほど気にしていないようだ。

そんな二人のやりとりを見た通行人が見てふとささやきあっていた。

「なあ、スカリエッティってあの犯罪者と同じ名字だよな？」

「そんなの偶然だろ。それより、あのスカリエッティって子、かなり可愛くないか？ 俺マジで好みだわ」

「あ、俺も俺も」

そんな会話を知ってか知らずか二人は店内に向かいながら楽しげ

に会話を始めた。

「なあ、スカリエッティ。今、カップルなら価格が安くなるキャンペーンやってるからカップルのふりしない？」

「カップルって……男と男ですよ。見えるやけないじゃないですか」

その会話に割り込むように店員が話しかけてきた。

「あ、お客様。今、カップルなら価格が安くなるキャンペーンを実施していますので、あちらのカップル専用席にどうぞ！」

それを聞いて先輩と言われた男が一言。

「な」

それを聞いてスカリエッティと言われた明らかに女にしか見えない男が一言

「え」

そのまま、流される形で二人はカップル専用席に向かった。

第一話 紫の遺伝子（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563z/>

紫の遺伝子

2011年12月30日22時47分発行